初年次日本人大学生が自由記述で挙げる レポート執筆時の困難点

辻本　桜子
TSUJIMOTO Sakurako

1. はじめに

筆者が勤務する愛知淑徳大学では、初年次開講科目として「日本語表現」という科目が設置されている。この科目は大学での学修に必要なライティングスキル修得を目的とした科目で、1 年生前期に開講される「日本語表現 1」（以下、N1）と、1 年生後期に開講される「日本語表現 2」（以下、N2）の 2 科目がある（注1）。「N1」は 全学部全学科全専攻の 1 年生の必修科目となっており、「N2」は、1 年生後期に開講される科目で、こちらは学科専攻ごとに必修または選択科目となっている。

ここで「N1」のシラバスの概略を述べると、第 1 回目の授業はオリエンテーションで、第 2 回目から第 4 回目で学術的文章執筆時に適切な文章表現や文法について学修する。そして 5 回目から 7 回目で 1 本、8 回目から 10 回目で 1 本、11 回目から 13 回目で 1 本の小論文の執筆準備をさせ、合計 3 本の小論文を提出させる。

次に「N2」のシラバスについて概略を述べる。第 1 回目の授業で活動グループを決定し、グループごとに発表テーマを決め、以後すべての回でグループワークを行う。2 回目の授業で発表テーマに基づいた資料の収集を開始し、3 回目で収集した資料をグループで検討し、4 回目でアウトラインを考え、5 回目で中間発表を行う。そして 8 回目から 11 回目でグループ発表を行い、その後、発表が終了したグループからレポートの執筆準備を始める。発表はグループで行うが、レポートは個々に執筆させ、最後に最終課題として 3,500 字以上 4,000 字以内のレポートを提出させる。

このように「日本語表現」では、前後期で合計 30 回の授業を行っており、筆者は前後期ともに必修科目となっているクラスの担当をしている。そして、ライティングスキルのどの項目に力を入れて指導するべきか、指導順序はこれでいいのかと、常に自問自答しながら授業を行っている。

ところで、話題は変わるが、本授業では学期終了時に科目独自のアンケートを行っている。以下は「N1」の学期末に実施している授業アンケートの質問例である。

1. 文章作成前にアイデアを広げたり深めたりすること
2. 自説の主張に導く文章展開（アウトライン）を考えること
3. 自説の主張に適した根拠を探し提示すること
4. 事実と意見（分析や主張）を分けて考えること
5. パラグラフの役割を生かして文章を書くこと
6. 意味の通りやすい簡潔な文を工夫すること
7. 学術的文章に適した言葉や文体を工夫すること

上記は受講前後の学修スキルの定着に関する質問例であり、自己評価をさせている。回答方法は「十分できる」から「全くできない」までの 6 件法である。2021 年度の受講アンケートの集計結果を見ると、学生の自己評価は上記質問 1 から 7 まで、すべて受講前よりも受講後に上昇していることが分かる（松本 2022）。このようにアンケートの回答ではすべての項目で受講前後に自己評価が上昇したところで前期授業を終えるが、同じ受講生が後期になってもまだ学術的文章を書くのを苦手そうにしていることがある。アンケートの回答はすべての項目で自己評価が上昇しているのに、それはなぜか。その要因として、アンケートの学修スキルに関する質問項目に漏れがある可能性が考えられる。質問項目は授業担当者が考案したものであるが、学生自身が感じている困難点を見落としている（項目に含まれていない）可能性があるのではないか。筆者を含む本授業の担当者は、学生が執筆した成果物を定期的に評価する機会があり、困難点は把握しているつもりである。しかしそれは顕在化した困難点である。学生自身が感じている困難点とは相違があるのではないか。このように考え、本研究では、今後「日本語表現」のシラバスとアンケート項目の改訂を行う際に参考にするため、受講生にレポート執筆時の困難点について自由記述式調査を行い広く問うことにした。

ところで、調査の時期と調査回数を考えるにあたり先行研究を調べたところ、三井ほか（2020）では調査は前期の計14回授業のうち第6回目に実施されていた。なお、そこで得られた学生の困難点は、参考文献を活用して根拠を示し論拠によって裏付けのある文章を書くことが挙げられていた。三井ほか（2020）では同じ学期の途中で調査は一度だけ行われていたが、本研究では後期授業開始時（つまり初年次前期の終了時とも言える）と、後期授業終了時（つまり初年次後期の終了時）の 2 回調査を行うことにした。2 回の調査時点で困難点に差が見られるかについても比較を行いたい。

2. 調査の概要

2.1 調査の時期

調査の時期は、2021 年度後期の「N2」開始時の 9 月と、後期終了時の 2022 年 1 月である。

2.2 調査の対象者

調査の対象者は、前期開講科目「N1」受講後、後期開講科目「N2」を受講した愛知淑徳大学の初年次学生である。調査対象者は、後期開始時の 9 月は 82 名、後期終了時の 2022 年 1 月は欠席者が 3 名いたため、79 名であった[注2]。

2.3 調査の方法

調査の方法は、レポート執筆時に感じた困難点に関する質問紙調査を行った。質問項目は 1 問のみで回答は自由記述とした。以下が後期開始時に行った 1 回目の調査の質問項目である。

質問：大学入学後に作成したレポートをふりかえって、作成中困ったことやスキル不足を感じたことはなかったか。その内容をできるだけ詳しく説明した上で、今後どんなスキルを身につけたいか説明してください。

後期終了時に行った 2 回目の調査では、上記質問中の下線部「大学入学後」を「後期」に変えて同様の質問をした。

3. 調査の結果

以下は質問に対する学生の記述例である。

＜学生の記述例＞
自分で書いた文章を見直す際に、多くの時間がかかってしまうにもかかわらず、どこかに見落としがあり減点されてしまっていた。後期は、見直し技術の向上と効率強化をしていきたい。
また、参考文献の探し方も不慣れで、なかなか目的にあった資料を探し出せないことが多くあるため、探し方を工夫して学習を進めていきたい。

記述結果の分類に当たっては、上記の例のように、同一の回答者が複数の困難点を挙げていることがあったが、下線部をそれぞれカウントすることにした。上記の例では下線部「見直し技術の向上と効率強化をしていきたい」を「推敲」に関わる困難点、点線部「参考文献の探し方も不慣れで、なかなか目的にあった資料を探し出せないことが多くある」を「参考文献の検索」に関わる困難点に分類した。このようにして、後期開始時の 82 名分、終了時の 79 名分の記述の分類を行った。

3.1 後期開始時の調査結果

表 1 は後期開始時の調査結果である。学生が調査の回答で挙げた困難点は全 20 項目確認されたが、紙片の都合により、表 1 にはそのうち上位 10 項目を挙げた。分類名は学生の回答のキーワードから付けた。

表 1 後期開始時の困難点 (N=82) ＊複数回答あり

主な学修時期		困難点	人数	割合
前期	後期		(人)	(%)
	○	参考文献の読解	17	17.2
	○	参考文献の検索	16	16.2
○	○	文章表現	12	12.1
○	○	構成	10	10.1
○	○	説得力のある根拠	7	7.1
○		語彙力（和語、漢語）	5	5.1
○		接続語（つなぎ言葉）	4	4.0
	○	参考文献の要約	4	4.0
	○	参考文献の引用	4	4.0
○	○	内容、発想	4	4.0

表 1 に示したように、困難点の 1 位は「参考文献の読解」(17.2%) で、2 位は「参考文献の検索」(16.2%)、3 位は「文章表現」(12.1%)、4 位は「構成」(10.1%)、5 位は「説得力のある根拠」(7.1%) であった。

以下に困難点 1 位の「参考文献の読解」についての学生の記述例を示す。

＜学生の記述例＞
「自分で決めたテーマについて考察せよ」という課題が出た際に、テーマとそれに合う参考文献は見つけることができたが、その参考文献から（必要箇所を探して）自分の考察に上手く繋げることができなかった。参考文献から自分の考察に上手く繋げる方法を身につけたい。

上記のほかにも、参考となりそうな文献を見つけたものの、必要箇所の見極めができず引用箇所に迷う、事実と意見を区別して読み取ることができない等の意見が見られた。

次に困難点 2 位の「参考文献の検索」についての学生の記述例を示す。

＜学生の記述例＞
レポートの資料選びに苦戦をしました。映像系の授業の際の、○○について考察せよ。というレポート課題で、資料を見つけることができませんでした。図書館に向かったのですが、相応しいものを見つけられなかったです。今後の学習で、参考文献の見つけ方を理解したいです。

＜学生の記述例＞
「〇〇についてどう考えるか」というレポート課題が出たときに、いろんな人の意見が書かれているサイトをいくつか見たが意見がバラバラすぎてどれを参照すれば良いかわからなかった。結局、検索して一番上にでてきたサイトを参照した。ネット以外で良い参考文献を見つける方法を知りたい。

このように、「参考文献の検索」が困難という意見が2位であった。実際に学生の様子を観察していても、前期中、資料を探す時には、とりあえずスマートフォンを取り出しインターネットで検索をする。そして検索結果を下までスクロールして見ないで最上位に表示された資料を参照するという学生が見られた。

困難点の3位は「文章表現」であった。以下に学生の記述例を示す。

＜学生の記述例＞
前期の日本語表現T1の授業では、レポートの書き方で「です・ます」ではなく「だ・である」を使って書くなどの基本を学ぶことができたが、見落としなどが多く完全に正しい書き方で提出することができなかった。
後期は、前期よりも間違いが少ない状態でレポート課題を提出できるようにしたい。

上記のように、文体の選択や主観的表現を使用しないこと等、表現についての困難さを挙げる回答が見られた。

困難点の4位は、「構成」であった。学生の記述例は以下の通りである。

＜学生の記述例＞
レポートを書く際に、(略)、どのように文を組み立てれば良いか等の構成の部分が分からなかった。うまく自分の主張を伝えられる「構成」の仕方を身につけたい。

困難点の5位は、「説得力のある根拠」であった。以下に学生の記述例を示す。

＜学生の記述例＞
自分の主張をする際に根拠が弱いと感じることが多かった。参考文献や客観的な意見等を用いて、説得力のある根拠がある文章を書けるようにしたい。

再び表1を参照されたい。表1の左列に各項目の主要学修時期について記している。これを見ると、困難点1位の「参考文献の読解」と2位の「参考文献の検索」は後期の「N2」の学修項目であり、後期開始時に困難に感じているのは当然と言えるかもしれない。しかし翻って見れば、前後期のシラバスを見直し、これらの項目を前期の学修項目に含めるべきと言えるかもしれない。

3.2 後期終了時の調査結果

次に表2に後期終了時の調査結果を示す。学生が調査の回答で挙げた困難点は全27項目確認されたが、紙片の都合により、ここでは上位10項目を掲載する。

表2 後期終了時の困難点 (N=79) ＊複数回答あり

主な学修時期		困難点	人数	割合
前期	後期		(人)	(%)
	○	参考文献の読解	17	15.6
	○	参考文献の検索	15	13.8
○	○	構成	13	11.9
○	○	説得力のある根拠	12	11.0
	○	参考文献の引用	10	9.2
○	○	文章表現	9	8.3
		主張の明確化	6	5.5
○		語彙力(和語、漢語)	5	4.6
○	○	論理的思考	3	2.8
○		タイトルの付け方	2	1.8

学生が挙げた困難点の1位は「参考文献の読解」(15.6%)で、2位が「参考文献の検索」(13.8%)、3位が「構成」(11.9%)、4位が「説得力のある根拠」(11.0%)、5位が「参考文献の引用」(9.2%)であった。

表2の左列には、各項目の主要学修時期を記している。これを見ると、上位5項目の主要学修時期は後期であることが分かる。ただし「構成」と「説得力のある根拠」については前期の学修項目でもあり、前後期を通して学修の機会があったにもかかわらず、後期終了時にも困難に感じている学生がいることが分かった。

4. 考察

表1、2に再度目を向けると、後期開始と終了時に共通して、困難点の1位は「参考文献の読解」(開始時17.2%, 終了時15.6%)であり、2位は「参考文献の検索」(開始時16.2%, 終了時13.8%)であった。これらは共に後期の学修事項であった。後期授業では2回目で、図書館OPAC、CiNii Research等の検索サイト、ジャパンナレッジ、朝日新聞等のデータベースの使用方法を、Google、Yahoo!については「ac.jp」と「go.jp」のドメイン指定の方法を学生の前で実演しながら紹介する。そして、発表テーマに応じた資料の検索と収集を課題にし、結果を記入し提出することという指示を出している。教員は提出された課題を通じ、検索状況の把握と書誌情報の記載方法の評価も行っており、授業中の説明に課題の評価と、時間

を掛けた指導を行っているつもりである。しかし、今回の調査で「参考文献の検索」が困難点の2位であることが分かった。これについては指導時に改善の余地がある。

次に困難点1位の「参考文献の読解」について注目する。後期の第3回目の授業で、入手した資料を持参させ、資料から「基本用語や概念に相当する内容」「議論にはどんな背景・経緯があるか」「誰がどんな意見を述べているか」「どんな問題点や課題があるか」を読み取り、グループで情報共有する機会を設けた。しかし、資料の精読指導は行っていない。この項目が困難点1位であるならば、授業中に読解の練習時間をもう少し設けるべきか。また、受講生には資料の読解テクニックの学修をする2年次以上開講の選択科目の受講も勧めたい。

次に、後期開始時4位(10.1%)、後期終了時3位(11.9%)の「構成」及び、後期開始時5位（7.1%)、後期終了時4位（11.0%）の「説得力のある根拠」について考察を行う。「構成」については、前期の「N1」では、序論・本論・結論の意識化と、パラグラフ・ライティングの役割と書き方の指導をしている。後期の「N2」では、グループ発表で使用する資料とレポート執筆時の構成のヒントを提示し、執筆時に章立てを行うよう指導をしている。しかし、調査結果を見るとまだ不十分であるようだ。

「説得力のある根拠」については、近藤ほか（2017）と近藤（2018）に、初年次学生が主張の根拠に使用した情報の調査結果が掲載されている。それによると、1位は「自分が当然だと考えていること」(78.3%）で、2位は「世間で周知の事実」(63.6%)、3位は「資料の使用」（58.5%)、4位は「自分の経験」(36.4%)、5位は「新聞やニュース」(23.5%）であった。そして、初年次学生の主張の根拠の問題点として、個人の経験等による私的な視点が取り入れられていること、課題として、情報の客観性や信頼性を意識化させることと述べられていた。この問題点は、ほぼそのまま本調査の対象者にも当てはまる。そのため「日本語表現」の授業では、通年で客観的で信頼性のある根拠を用いることを指導しており、教員から見ると後期終了時には良くできるようになっている。しかし、学生の自己評価は低いという結果が見られた。

次に「文章表現」について述べる。後期開始時には困難点3位(12.1%)であったが、後期終了時には6位(8.3%)にランクダウンしていた。「文章表現」については前期から繰り返し学修し、後期終了時にはようやく少し自信が持てるようになったようであった。

最後に「参考文献の引用」について、後期開始時には4.0%で7位だったが、後期終了時には9.2%で5位になっていた。これは前期の学修項目ではないため、前期は特に意識せずに引用し、困難に気づいていなかったためか。最終レポート提出前の最後の2回の授業は引用の目的、引用の書き方の学修に時間を費やしたが、知識が未定着のまま学期末を迎えたのかもしれない。

4. まとめ

本調査の結果から、「参考文献の読解」「参考文献の検索」「構成」「説得力のある根拠」、この4項目は初年次後期開始時にも終了時にも、学生が挙げるレポート執筆時の困難点の上位であることが分かった。これらの項目について、指導時に特に留意が必要である。このうち「構成」と「説得力のある根拠」については前期授業の学修項目に含んでいるが、「参考文献の読解」と「参考文献の検索」は前期には指導していない。後期の学修項目である。しかし、前期中、他科目で学生に参考文献を使用したレポート課題を課す教員がいるようで、本調査で困難点に挙げる学生が多数いた。これらの項目については、前期での指導を考慮するべきかもしれない。本調査の結果を今後の「日本語表現」のシラバスとアンケート項目の改訂の機会に活用したい。

注

1 調査時の2021年度は科目名が「日本語表現T1」「日本語表現T2」であったが、2022年度より、それぞれ「日本語表現1」「日本語表現2」に変更された。

2 調査対象者には、本調査について書面と口頭にて説明を行い、調査協力同意書への署名を持って、研究利用の許諾を得ている。

参考文献

近藤裕子・中村かおり・向井留実子（2017)「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」『日本語教育方法研究会誌』第24巻第1号, pp.102-103.

近藤裕子（2018)「大学初年次におけるライティング指導の課題－説得力のある文章作成に向けて－」『国文学踏査』第29号, pp.169-176.

松本明日香（2022)「「日本語表現T1」「日本語表現T2」受講アンケート集計結果」『愛知淑徳大学初年次教育研究年報』第7号, pp.23-25.

三井規裕・時任隼平・福山佑樹・西口啓太（2020)「大学初年次生がアカデミック・ライティングのどの技術を苦手と感じるかの検討」『日本教育工学会研究報告集』第20巻第4号, pp.91-96.

付記

本稿は第28回大学教育研究フォーラム（2022年3月16日,京都大学（オンライン開催））において「初年次日本人大学生が自由記述で挙げるレポート執筆時の困難点」と題し行った発表内容に、加筆・修正をしたものである。